

『ゆけむり史学』第三号の刊行によせて

田村 憲美

この頃、学会に参加すると背中から声をかけられることがある。それは、別府大学の学部を卒業して他大学の大学院に進学した方だったり、本学の大学院を修了した方だったりするのだが、そういう折には、私もそんなに長く別府大学で教員をしていたのかと、一種の喜ばしい感慨があつたりする。私よりも先任の教員方が聞かれましたら、微苦笑なさることだろうが。

その感慨にともなつて、もうひとつ起こる心持がある。声をかけてくださる方々の境遇は、勉強・研究に苦しんでいた、就職の見通しに憂鬱だったり、職場のある方でも様々の重荷をかかえていたりもするだろうに、その日その時に、ほかならぬその場所におられるのは、歴史の知識を更新し、認識を深める作業に自分も加わろうという気持ちがあれば、考えられないことだ。そう思うと感ずるのは、「みんな好きなんだ」という共感だ。学会で本学を出られた方々にお目にかかる時、そういう初心が、とりわけ強く確認されるように思う。大学院で歴史を研究する学生は、そういった「共感の共同体」の一員、すくなくともその予備軍だ。

歴史学は、それを遂行するために特別の資質を求めない稀有な分野ではなからうか。もちろん、他のどの仕事とも同じように、有能だつたりなかつたり、センスがあつたりなかつたり、ということはあるにしても、歴史学の分野で有用な業績を上げるのに、最高度の頭の良さや人間離れた体力や感覚、あるいは天賦の才能は、およそ必要とされない（と、私は思う。ほかの教員の方々もたぶん同意してくださると信じている）。

歴史にとりかかる人々は「好き」という気持ちを持続させて、ゆつくりと、でも丁寧に作業し、他人に尋ね、繰り返し自問自答して、洞察と理解を進めていく。歴史学にノーベル賞はないし、日本の勲章もたぶんたいいていもらえないから、かえつて好都合だ。よく考えれば、歴史を形作ってきたのは尋常普通の多数者なのだから、それは当然かもしれない。

以前、どこかで保立道久さん（東京大学史料編纂所の日本中世史研究者）が歴史学は「野蛮な学問」と形容されていたのは、歴史学のこういう地味さ・実直さをいっただと思ふ。「好き」を持続させ、歴史学を梃子として「共感の共同体」の一員となるのは、遊んでいてはまずいかもしいないが、普通の人間には絶対に不可能な難事というわけではないのだから、大学院歴史学専攻で学んでいる学生は、歴史学を選んだという一点で、もうすでによい選択をしているともいえる。

学生の皆さんが作る『ゆけむり史学』もとうとう三号を迎える。どうか、ゆけむり史学会とこの会誌がこれからも皆さんの手助けとなるように。